婦人と新社會

山田わか主筆

三月號

家庭　科學　宗教

宗教と科學

社會科學の原則

社會科學と家庭

現代人と家庭

產業と家庭

性慾と家庭

結婚と家庭

婦人と家庭

自然の不平等と文明

每月一回一日發行　第四十八號　大正十三年三月一日發行

東京府　婦人と新社會社發行所

大正九年二月二十三日第三種郵便物認可
大正十三年二月廿三日印刷納本

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

自然の不平等と文明

文明とは蓄積された知識であつて、たとへば、一人の人間が文明の始めから今日迄生き續けて來て、そして、絶へず學びつつあつたようなものだと云ふ說があります。

けれども、これは要するに唯、眞理に達する第一步です。なぜなら、一人の人間の仕事は、其の人がどんなに非凡な天才であつても、到底數萬の人間の仕事とは匹敵出來ません。そして、多くの人の仕事が一人の人の仕事に勝ると云ふ理由は、各人の現す功績には大小の差こそあつても其の各人が各自の個性を持つて居るからです。そして、衆多の此の個性が則ち文明の眞髓であります。

個性の存在と云へば、其れは直ちに人知の自然の不平等を意味します。そして、それが社會進化の最も重要な要素です。云ひかへれば、文明を廣くし豊富にするものは科學を廣く豊富にするのと同じく人間の自然の不平等です。

つまり、數萬人のうちの各人の仕事が其れ〴〵に異つてゐる。從つて、其の各人の進み行く道、其の生產物が無限に異つてゐる。そして、これが一人の人間の仕事よりも多くの人間の仕事の方が勝つてゐる理由です。して見ると、文明を廣くし豊富にしてゐる人間の不平等を除去しようとする計畫は文明を破壞しようとする計畫ではないでせうか。

實に、人知にとつて最も重要なものは人間が持つて生れた不平等です。そして、此の不平等があればこそ調和の必要と云ふことが起つて來ます。

ですから、問題は、自然に備つてゐる不平等を除去するのではなく、不平等を其のままにして置いて、如何にして調和させようかであらねばならないと思ひます。

Digitized by Google Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

家庭科學宗教

宗教と科學　佛教であれ、基督教であれ、其の他如何なる種類の宗教でも、其の目的とする處は人間の生活を正しく導き、幸福を增進し、進步向上を計ろうとするものでありませう。そして、神に又は佛に奉仕すると云ふことは人間に奉仕することである、つまり、他人のために働くことであると云ふことも明らかです。其處で、現代生活の必要に順應した宗教は凡ての人に信仰と希望を持たせ、それ〴〵の人の持つて生れた天分を充分に發達させ、お互ひの幸福と進步のために共同的精神を鼓舞するものでなければならないと云ふことも亦明らかです。

處で、私共相互のために幸福と進步を增進しようとしても、一體、どう云ふものが幸福と進步の增進となり、どう云ふ事柄が其の妨げとなるかと云ふことを先づ適確に知る必要が起つて來ます。そして、それを適確に知るには科學の力を借りなければならなくなります。醫學が發達して病氣を治す方法が考へ出されたり、物理學が發達して今日の文明的な便利なものがいろ〳〵發明されたよ

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

うに、社會上の事柄も科學の力によつて、何が進步幸福に資するか。何が不幸を醸すかが明瞭にならないうちは本當に有利な仕事は爲されません。

宗教にしろ、科學にしろ、考へようによつては非常に難しい嚴肅なものですが考へようによつては非常に簡單です。宗教の敎への中心は人のために働くことであつて、どんな些細な行爲でも其れが人のために爲されたと云ふ理由で威嚴がある、つまり、其れが宗教の本體（神であらうが佛であらうが）への奉仕であるからとされてゐますし、科學の敎への中心も人類社會の幸福の增進が目的であります。

ですから、科學と宗教は相反するものではなく、相提携して進んで行くべきものであると私は考へます。

宗教と科學とは兩立出來るものでないと云はれてゐるのを私共は時々聞きますが、私はさうは思はないのです。兩立出來ないと云ふ人は、宗教は私共の知識の屆かない天上の事柄を信ずるのであり、科學は私共の肉眼を以て明らかに見ることの出來る事柄を取り扱ふのだからと申ます。けれども科學だからと云つて私共の目に見ゆるものゝ一切を説明してゐるものではありません。

何にもかも分つてゐるのではないが、併し、或るものに對しては或る程度迄分つてゐる。そして其れを基礎として其の先きのことは矢張り信仰で行くより外に道はないのですから、要するに、宗教も科學も五十歩百歩であらうと私は考へて居るのです。

そして、宗教の眼目とする處が社會奉仕であり、科學の目的とする處も人類の幸福を增進ようとするのでありますから、此の兩者は相提携すべきものであると私は信ずるのです。

社會科學の原則 現代の社會科學は此の世界の凡ての富が人間のうちに存在してゐることを明らかにしてゐます。つまり、人間を離れては如何なる種類のものも何等の價値がないとしてゐるのです。ダイヤモンドが貴いと云ひ、金が便利だと云つても、其れは人間が使用するから貴いのであり便利であつて、人間を離れたならば其れは路傍にころがつてゐる石ころ同樣です。其の外どんな品物でも、其れが人間の爲になるものだとして人間が取り上げるから價値があるので、人間が取り上げなかつたならば一錢の價値もありません。

つまり、私共人間の知つてゐる凡ての價値は皆人間が創造したものです。他の言葉をもつて云へば、人間自身が價値の唯一の源であります。人間自身が最高な價値其のものです。ですから、人間

のうちに存在してゐる富源を發達させることが永久に此の世界を富ませる方法なのです。其處で、人間社會の最大なる問題は、最善なる方法を以て、社會の生命、云ひ直せば、人間の生命を繼續させ向上させるために努力し得る優良な人間を造ることです。

社會科學が價値ある者とする人間は單獨に孤立してゐる人間ではありません。人は他の人と關係を持つてゐる處に價値があります。他の人との關係をだん〳〵廣くして行くことによつて其の人の價値はだん〳〵大きくなります。云ひかへれば、社會と云ふ集合生活は人間同志の奉仕の交換を繼續することによつて營まれる。人の生活は此の相互奉仕によつてのみ可能であり、幸福です。

そして、此の奉仕の交換が烈しくなればなる程、私共の生活は安定するし、又、此の奉仕の交換が平等に行はれゝば行はれる程私共の社會生活は調和して來ます。つまり、社會科學は人間の共同を集合生活の內部的建設的の原則と見てゐるのです。

ですから、文明と共の文明の價値は人間同志の共同の繼續と發達によるものです。そして、宗教の目的は此の共同を益々大きくしようとするものであらねばならず、社會科學の目的は如何にせば其の共同が可能となり、益々大きくすることが出來るかであらねばならないと思ひます。

社會科學と家庭 宗教並びに社會科學の目的が奉仕、共同と云ふことであるならば、そんならば、其の第一の具體的の且つ社會的の仕事は、奉仕の精神、共同の精神を具備した人間を養成することであり、さう云ふ人間を養成するにはさう云ふ人間を養育し得る家庭の建設に最高な注意を拂ふことであります。

ダーウインの自然陶汰の學說が現代の生物學に於て重要な位置を占めてゐると同じように、人間社會に於ける第一義のグループは家庭生活であると云ふ學說は現代の社會科學のうちで重要なものとなつてゐます。

家庭と云ふ一ツのグループが社會生活の第一義のものであると云ふ理由は、其れが元始時代から續いて來た、そして、一般的な形式であるからと云ふことばかりでなく、何時の時代でも、亦、何處の國でも、人間が獸類とは異つた人間らしい人間、つまり、一個の社會人として價値ある人間となるには家庭が其の苗床であるからです。云ひかへれば、家庭は人間の社會的價値の製造所であるからです。

人は家庭に於て、社會生活に必要な共同の習慣を獲得します。私と云ふことの代りに私達と云ふ

言葉を覺へるのも家庭です。

此の地球の上に人間の生活が始まつて以來、進化の凡ての時代を通して一切の云ひ傳へを保存し、そして、傳へて來た處は家庭です。家庭に於て子供は彼の最初の言葉を覺へ、そして、其の言葉によつて社會遺傳の全部を受け容れます。産業、政府、法律、藝術、道德、及び、宗教に關する觀念や信仰や標準を其の言葉によつて子供は自分のものとします。

つまり、人類と獸類とを區別する一切のもの、云ひかへれば、人間らしい人間となるに必要な一切のものを人は家庭生活によつて與へられるのです。要するに、子供は彼の主もなる社會教育を家庭に於て授けられるのです。其處で、家庭は人間社會に於ける最も重要な教育機關であることを社會科學は認めてゐるのです。

一言で申ますなら、家庭は子供を社會的に價値ある人間とするための最も順當な最も適當な場所であつて、そして、此の家庭に代るべきものは外に絶對にないことを社會科學は認めて居るのです。

家庭が順當であるならば、子供は奉仕の精神を養はれ、自己犧牲の習慣を獲得しますから、家庭は一般社會に於ける利他主義の根であります。ですから、社會に於ける利他主義の多少は其の社會

本号は山田家で二冊所蔵されていらっしゃいますが、どちらも七～一〇頁が落丁しております。
小社では完全復刻のため極力探索いたしましたが、刊行までに見つけることはできませんでした。
このような形で出版することになり深くお詫びいたします。

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google
Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

Digitized by Google

Original from
UNIVERSITY OF MICHIGAN

けれども、現代の所謂個人主義的思想に毒されて家庭の眞の意義が不明になつた結果は性の衝動を満足させることが結婚及び家庭生活の目的であるかのように考へる。が、其の満足は無限に得られるものでない。其處で三角關係や四角關係が出來上るのです。

人類の生命、並びに、社會が繼續するためには男女兩性の性の作用は缺くべからざるものであります。

缺くべからざるものではありますが、併し、それは手段として取り扱ふべきものであると私は考へます。生命を繼續させ、そして、向上させるために其れが手段であると考へるならば家庭生活の健全を期するためには其の衝動を抑制することが出來ます。抑制することによつて一家のうちには幸福があり向上がありますが、抑制することをせず、衝動の起るまゝの行動を取つて行くならば、其れは獣類の生活と等しいものになります。つまり、性の衝動を満足させることが結婚及び家庭生活の目的とする時には人間の生活と獣類の生活と同じものになるのです。

宗教は長い以前から其の點に氣付いてゐました。そして、古い宗教は長い間性の衝動を全然禁壓することに努力してゐました。けれども、其れは餘まりに消極的でありました。古い宗教家が考へ

て居たように、性の衝動を全然禁壓してしまうことは其れを放縱にして三角關係四角關係を造つて行くのと、社會に有害であることは大差ないと思ひます。

其處で、現代の社會科學は抑制の必要を認めると同時に、積極的建設的態度を取つてゐるのです。なぜなら、性の衝動が家庭並びに社會の有機的基礎であるのみならず、より高尙な精神生活の基礎で其れがあることを認めてゐるからです。より高尙な生活へ向上して行く手段として人間は性別を與へられて居ること、そして、此の性の衝動と云ふ手段は眞面目な健實な家庭生活のために抑制することによつて其の役目が全ふされることも認めてゐるのです。

家庭の健全を期するために、そして、健全な家庭を建設することによつて人道への奉仕であると云ふ精神を以て性の衝動を抑制するならば、人類の生命、家庭、並びに、社會は益々健實に榮へて行きます。

ですから、新しい宗教上の理想は禁慾生活或ひは獨身生活でなく、純潔な永久的な家庭生活であると云ふことになります。かくして男女兩方の貞操は社會上重大なる意義を持つことになります。

貞操は男子にも女子にも同じように社會上必要な道德です。男女平等に貞操を守ることによつて

云ひかへれば、性の衝動が家庭生活を犧牲にすることの代りに、家庭生活が性の衝動を犧牲にすることによつて社會全體が純潔になり高尙になります。

結婚と家庭　要するに、結婚及び家庭に對する一般人の態度に革命が起らなければなりません個人の幸福、個人の便宜として結婚及び家庭を考へることの代りに、社會的に責任があり、且ツ人道に奉仕する機會として考へるようにならなければならない。つまり、結婚及び家庭生活を利己主義の基礎の上に置く代りに、社會の善、他の言葉を以て云へば、道德を基礎としなければならないのです。

結婚當事者に向つて凡ての人が祝詞を述べるのは其れが種族並びに社會への奉仕となり、其のために神聖であると考へるからです。けれども、結婚が單なる氣まぐれからであり、獸慾を滿たすのが其の主もなる目的であり、又は、遊戲氣分からであるならば、人は其の結婚に對して侮蔑の目を投げこそしても祝詞を述べる氣持ちにはなりません。と云ふのはさう云ふ結婚は、結婚の本當の意義を沒却して居ますし、從つて、やがては本人逹の不幸を招くことになるのみならず、必ず、社會も害を受けるに定まつてゐるからです。

現代の社會科學は結婚及び家庭の主もなる目的が子供であることを明らかにしてゐます。家庭が社會に奉仕すると云ふことは、取りも直さず子供に奉仕すると云ふことです。現に生れて居る子供これから生れるであらう子供を中心とすることによつて、自分よりもより優良な子供を造るために商業又は産業に勵み、品行を愼しむことによつて、家庭は健實となり高尙になります。なぜなら、子供が種族並びに社會の代表者であるからです。此の社會が唯に繼續するのみならず向上して行かねばならぬとすれば凡ての子供の優良と云ふことが最大重要です。

ですから、文明と云ふ大建築物の中で最も重大なる問題は子供の幸福と云ふことです。社會生活の改造は其の社會を構成してゐる人間其の者を改造しなければならず、其の人間の改造は生れた時から始めるのが最も有効です。其處で、子供の幸福が文明の中心問題となるのです。

そして、子供の幸福には平和な健實な家庭が無くてならないものであると云ふことは社會科學が立證してゐるばかりでなく、常識によつても明らかです。

家庭を度外視して子供の幸福を計ろうとすることは火力を用ひないで蒸氣を起そうとするのと同じです。優良な子供を造る第一條件は平和な健實な家庭です。

家庭以外の子供のための社會施設や、慈善團體の設備は皆不完全な家庭の代用物に過ぎないものです。

ですから、個人の幸福、社會の進歩を希望するならば、最大限度に商業産業に從屬せしめられない家庭、性慾のために汚されない家庭の數を增加させることであります。

結婚並びに家庭を利己主義的に、つまり、個人の幸福を基礎として設定しようとした企てが失敗であつたことは明らかです。個人の幸福を基礎とする處に離婚問題が頻々として起ります。離婚の數が殖へれば殖へる程、家庭生活は不安定になります。

一例を合衆國に取りますならば、一九一六年には離婚の數が十二萬あつて、そして、其のために兩親の揃つた家庭を失つた子供が十五萬人ありました。兩親が自己滿足主義を取つて容易に離婚を決行した結果は、優良な市民となるべき共の十五萬人の子供が、やがては、兒童裁判所の手にかゝつたり、靑年期の罪悪に浸つて社會に害毒を流すようになつたのです。實に、私共が戰慄を禁じることの出來い事實です。

婦人と家庭　前號にも云つて置きましたが私共婦人は長い間人類生活の眞髓となるべき精神的

遺産、則ち、開闢以來多くの人が築き上げて置いた知力的道德遺産を受け繼ぐべき特權を拒まれて無知無學で居ました。其のために、家庭の精神的價値に付ても亦社會的價値に付いても盲目で居りました。其處にあらゆる禍患が巣くうことになりました。

婦人に知力的及び精神的の力が缺けて居たゝめに、婦人の主宰する家庭が物質上の利益のために蹂躙されたり、男子の倣縱な性慾のために汚されたりしてゐました。

男子の不品行に對してたまく反抗すれば其れは下らない嫉妬であるとして取り上げもされずに居ました。

けれども男子の不品行に對する抗議が單なる嫉妬、云ひかへれば、一時の感情からでなく、其の不品行のために健實であるべき筈の家庭が其の健實性を失ひそうになる危機、引ひては、社會に惡影響を及ぼすことを自覺しての抗議であるならば、其の抗議は有力なものであるに相違ありません。

一時の感情、單なる嫉妬であるならば其の背後に何にもありませんから其の力は微弱です。けれども、夫の不品行に反抗する婦人の背後に、第一には家庭問題が付いてゐるし、其の家庭の背後には社會問題が付いて居る時に、其の反抗の力は絶大です。

Digitized by Google　Original from UNIVERSITY OF MICHIGAN

私共婦人は長い間抗まれて居た知力的道德的遺産を受け繼ぐべき特權を第一に取り返へさなければなりません。云ひかへれば、道德的知力的の向上を計り得る機會を造らなければなりません。

同時に、大多數の婦人が必ず主宰しなければならない家庭の精神的並びに社會的意義を益々高調して、其の意義を不明にするような男子の我がまゝな行動に對しては私共一人々々の婦人が全國の婦人を代表して嚴然とした態度を示し得る意氣を造りたいと私は切に念じてゐます。

安定した家庭生活が無かつたならば社會を輝かす精神の火は消へて無くなつてしまいます。

私共婦人は、宗教並びに社會科學の力を借りて、家庭生活の安定を計り、其の家庭に愛情の力、他の言葉を以つて云へば精神の光りを益々盛んにして、其の光りを社會全體に漲らして行かなければなりません。

昨日の怪物今日の英傑

政界に何等存在の理由も名稱も持たぬ無用の、否、有害なる怪物と云ふ名を或る新聞が松方老公に附したのはツイ先日のことでした、けれども、今、老公の臨終が近づくや否や諸新聞の態度ががらりと變つて老公の逸話をかゝげ、其の德をたゝへ始めて居ます、變現自在なる其の態度に私共は唯々呆氣に取られて居るばかりです、凡そものには中心と云ふものが無ければならない「中心とは則ち統一です、けれども、今日の諸新聞に其の統一が見へないのは一體どうしたことでせう。

編輯の後

◎女三人寄ればかしましとか云つて女と云ふ女は皆おしやべりであるかのように云ひ傳へられて來まましたが、そんなら、男と云ふ男は皆無用の言を吐かない、所謂無口であるかと云ふとなかなかさうではありません。汽車の中でも乗合自動車の中でも若い男共が愚にも付かない駄言を大聲で並べ立てゝ居るのには同乗者は可なり弱はらせられます。概して云へば女には他人の前では幾分の遠慮と云ふものがありますが、男には其れがありませんから實際閉口させられます。で、私は『女三人寄れば』を『愚人三人寄れば』と訂正して其の愚人の中へ女も男も一緒くたに含めることにしようと思ひます。

◎死んだ兄が殘した借金の仕末をするために田舍へ行きました。日頃私共姉妹に好意を持ち同情を寄せて居て呉れる近所の老婆が「おまはんもおばアさん（私共の母）をしまへば樂になりますよ。おばアさんさへ見送つてしまへばもう其れでいゝ。安心が出來ますよ」と云つたので私ははつとしました。さう云ふ老婆に少しの惡意もないことを知つてゐる。唯々父の又は兄の病中の私共姉妹の苦心に對する其れが同情のほとばしりであると云ふことも分つて居るのです。併し、父を失ひ兄に死なれて、後に殘る唯一人の母の死！　其れが濟めば安心であり、樂になるとは其れに相違ない……けれども……私は大きな人生の矛盾がぶつかつたと思ひました。

◎印刷所がこみ合つてゐるために又々本號の發行が後れましたことを御詫び致さなければなりません

本誌臨時定價表		
一册	金十錢	（送料五厘）
六册	前金五十五錢	（送料共）
十二册	前金壹圓	（送料共）

■誌代及郵税は前金の事■御
送金の際は振替貯金東京五三
六八八番に御振込みのこと■
郵券代用は五厘切手にて一割
増■廣告は御照會次第御相談
いたします

大正十三年二月廿三日印刷納本
大正十三年三月一日發行

東京市四谷區南伊賀町四一
編輯兼發行人　山田嘉吉

東京市牛込區山吹町一八九
印刷人　大杉直次郎

東京市四谷區南伊賀町四一
發行所　婦人と新社會社
振替東京五三六八八